

〈研究ノート〉

文学が促す温泉のまちづくり —「城の崎にて」の精神性を掘り起こす

姜 東 星

【要旨】

2020年、コロナ禍によって世界的に渡航が制限され、来訪自粛、観光業が未曾有の危機に直面している。自由に旅行に行けない不条理を目の前に、「いかにして困難を乗り越えてきたか」、「どうやって生きるべきか」というコロナ危機に際して不安な生活を送っている中で、いっそうそのような考えに導かれるのである。

コロナ危機による人々の暮らしや人生観が大きく変わったとは言え、「本当に大切なものは何なのか」というコロナ社会の人間関係づくりの修復が精神力の回復と結ぶことに向けられると考えられる。

この研究ノートでは、「地域の歴史に息づく精神性¹」を喚起させる文学という着眼点で、日本文学が促す温泉のまちづくりの事例を紹介する。日本は火山列島のため、温泉が多々ある。従って、日本文学には温泉文学も極めて多い。そこで、志賀直哉の「城の崎にて」を取り上げながら、兵庫県豊岡市に所在する城崎温泉、この歴史的な由緒のある温泉街を再発見する。本稿では、この温泉街から「城の崎にて」の精神性を掘り起こすという考えを元に検討を加え整理した。文学と文学が生まれる場所の関係をどのように掘り起こしていくのか、掘り起こされるものはどのようなものか。文学的な要素に基づくまちづくりの核心は何かを「城崎」という場を巡って追求した。

キーワード：文学、温泉、まちづくり、記憶、継承、精神性

1. 問題の所在

NHK「コロナ禍を生きる、作家が語る「記憶」の役割²」の報道番組に、作家小川洋子氏は「記憶は裏返して言えば、決してどんな権力にも、どんな暴力によっても奪われてはならないもの、記憶の持っている強靭さ尊さを小説の中で描いてきた、体温を持った記憶、歴史が大事なもの、それこそが理不尽なものに対する抵抗だ」と述べている。同氏はさらに「今こそ物語を届ける意味があると言える。人と人が顔を合わせて話しができないことが、どんなに不自然なことか、思い知らされて、正体不明のものに脅かされて、コミュニケーションが取

れなくなっている。声が出せなくなっている。無口にならざるを得なくなっている。そういう声に出せない思いを文学ならすくい取れる」と、文学の可能性を示した。この可能性は、李静和の「生きることにつながる記憶³」と小林秀雄の「記憶を思い出そうとする⁴」文学の問題、つまり、人間の精神の回復の問題を浮上させる。「その人を、その人であると証明する根本的なものの記憶⁵」は、その保持により人間の尊厳が文学と重なり合うことで、精神の治癒に繋がっている。

(1) 設問の設定

本稿では、a)城崎温泉の地域づくりと自然環境の整備がどのように進められているのかb)志賀文学の「城の崎にて」を温泉文学として捉えた場合、どのように掘り起こすことができるのか c) 温泉地に文学的要素を積極的に加えることの効能とはどのようなものかという三点について整理する。

(2) 城崎温泉の文学上の場所について

城崎温泉は、兵庫県豊岡市城崎町に所在する。志賀直哉が初めてこの温泉を訪れたのは1913年であり、ここでの滞在をもとに「城の崎にて」を同人誌『白樺』（1917年）に発表してからおよそ100年以上経った今日も、「城の崎にて」の文学としての存在が脈々と受け継がれて来た。城崎温泉は「歴史と文学といで湯のまち」としての独自のアイデンティティーがあり、今では触媒となる文学の視点が不可欠の状況にある。

小説「城の崎にて」は、「城崎」という温泉地の場所の名前が題名になっている。

中村雄二郎は「場所（トポス）」について、次のように述べている。「記憶とは、なにより場所の記憶であり、言語もまた場所を介して記憶され、集積され、思い出される⁶」。記憶と場所は重要であり、「生命的なものを感じさせ⁷」ている。

一方、ミヒャエル・エンデは芸術について、「芸術というものは、何かある決まったことを押し付けるべきではなく、鑑賞者や読者を想像という遊びへ誘うものでなければならない。文学の使命は啓蒙ではなく治癒だ⁸」と言う。

このように、中村の記憶と記憶を「想起する⁹」場所の関係、そしてエンデの治癒という洞察は示唆に富む。文学という芸術の一形式は、身体と精神を結び付ける場所であり、生命の意味を探求する場所でもある。生命の一連のものを省みることを改めて考えさせられる。河合隼雄は「人と人との心の交流というのは、実に元気づけになるものである¹⁰」と、「元気づけ」という言葉で「深層意識への道」を辿る文学の力を示した。

ところで「住んで良し、訪れて良し」の原点回帰のまちづくり¹¹」をすることは、まちづくり¹²」を実行する上での理念となっている。その原点が、「関係者が一つになって共感し、外に向かっても誇れる地域アイデンティティーを醸成することが必要となっており、そのための手法として“こころ”と“もの”のシンボルづくりが求められている¹³」のである。この求

めに応じる取組みの一例として、城崎温泉の地域資源を紹介する。

2. 城崎温泉の地域資源について

以下に、城崎誇る「温泉」という天然資源を核として、これまでに培われて来た地域づくりの特性と環境保全の取組みを考察する。

(1) 地域づくりの特性

城崎温泉の沿革は、今から 1400 年前、コウノトリの足の傷を癒した湯の伝説に始まり、1300 年前には、時の高僧である道智上人の千日修行、救世祈願の仏心によって開かれたとされる。

日本が湯治ブームになった歴史は江戸時代からである。温泉医学の祖である後藤良山¹⁴が初めて温泉を治病に用いたのである。良山の遺志を継いだ医師香川修徳が、その著書『一本堂葉選続編¹⁵』に城崎温泉を「海内第一泉」と紹介し、薦めている。今も「海内第一泉¹⁶」の碑が残っている。温泉は「「湯治」の場所、疲労回復や健康促進、また病気療養のため¹⁷」に訪れたところとある。

明治から昭和にかけて、志賀の影響もあって白樺派の作家達や、柳田国男、木下利玄などの文人、山下清や小磯良平といった画人など、多くの文化人が癒しを求め訪れた場所となった。心身共に癒すことができる湯治の場だからこそ、後世に残る温泉文学が生み出されてきた。

豊岡市立「城崎文芸館 KINOBU」¹⁸は、志賀や白樺派と城崎の関わりや白樺派の代表作品の書籍や書簡、画帖、歌集、自筆原稿など、それらの文学作品に関する資料を収蔵し、展示品を閲覧することができる。その他には「志賀直哉年譜」と「白樺派の足跡マップ」などの展示もある。「文学と演劇と城崎温泉」など城崎文学にまつわる企画展も開催されている。

また、「城の崎にて」が生まれた志賀ゆかりの宿「三木屋」は、創業 300 年の老舗旅館として国の登録有形文化財に指定されている。この旅館は志賀の評として「温泉はよく澄んで湯治によく、周囲の山々は緑で美しい。おいしい日本海の魚を毎日食膳に出し、客を楽しませてくれる。人の心は温かく、木造りの建物とよく調和している」（『鳥谷武一手記』より直哉談）と伝えられている。今日では、その創業が江戸期に遡る温泉宿を数十軒も残す湯治のまちとしての歴史を積み重ねている。

「外湯を中心にまち全体が潤う」という「まち全体が大きな温泉宿」であることが城崎温泉の特性である。「「駅が玄関」、「道路が廊下」、「旅館が客室」、「お風呂が外湯」、そして「遊技場と土産物店がサービスを提供する」¹⁹ という、地域住民のおもてなしの意識から作り出される湯のまちである。ここでは、7 カ所の外湯の存在が大きい。大谿川沿いに、「鴻の湯」、「まんだら湯」、「御所の湯」、「さとの湯」、「地蔵湯」、「柳湯」、「一の湯」という源泉の趣が全く異なる外湯があり、コウノトリ伝説の鴻の湯²⁰は、不老長寿の湯、夫婦円満、幸せを招く

湯として多くの人々に親しまれている。「柳並木や太鼓橋、立ち並ぶ温泉宿にお土産店、温泉情緒あふれる城崎のまちを下駄でカラコロまち歩き。それぞれに味わいのある7つの外湯をはしごするのが、城崎温泉まち歩きの醍醐味²¹」であると言える。

(2) 環境づくりの特性

豊岡市の環境的資源の立脚が、地域のアイデンティティーの醸成にも深く繋がっている。その取組みは、青柳正規氏（2015）の「豊岡市が地域再生の願いを託したのはコウノトリ²²」と言う表現に端的に現れている。青柳は、「コウノトリは1956年に国の特別天然記念物に指定されたが、1971年に絶滅した。日本国内で最後まで生息していたのが豊岡だった。豊岡は最後の生息地というコウノトリによる町おこしを核にし、強いリーダーシップを発揮する中貝宗治市長他のリーダーシップ²³」が主導した観光地運営の力量があると指摘している。

豊岡市立コウノトリ文化館 ― 人と自然の共生を考える ― という名称のエコミュージアムの紹介文には、「人と生き物が一緒に暮らせる環境づくりを考えます。（中略）2005年から野生復帰に向けた試験放鳥を行い、2007年には野外での繁殖に成功しました。今では、豊岡盆地の田んぼや湿地でコウノトリと出会うことができます²⁴」と自然環境の豊かさの象徴になったと記されている。

このように、城崎温泉の形成の歴史のみに存在、残された温泉資源、町並みと自然環境は地域に活力をもたらしたのである。地域住民に大切に受け継がれてきた文化と生き方は、さらに、城崎のまちづくりの礎を確固としたのである。その地域が共有している価値観の形成は、志賀の文学の精神が貫いていると考えられる。以下では、短編小説「城の崎にて」の読みかえしを通じて文学の精神性を掘り起こす。

3. 生命と精神を貫く「城の崎にて」

「城の崎にて」は文学の場所である。以下にこの作品の舞台となった場所と小説はどのような思考、どのような参照を提供しているのか、という作品分析の観点から考察する。ここでは、文学は精神的に癒されることを考える。文学的な要素に基づくまちづくりの魅力を検討する。

(1) 「城の崎にて」は一つの文学の場所である。

『近代文学の至宝 永遠のいのちを刻む』に志賀直哉「城の崎にて」草稿「いのち」の貴重な生原稿がある。「1914年（大正3）頃に執筆。山手線事故の養生で訪れた兵庫県城崎温泉での体験をもとにまとめられ、『白樺』1917年5月に掲載された²⁵」。志賀は事故に際した自らの体験から生と死の意味を考えた。志賀直哉（1928）自選の短編集『小僧の神様』のあとがきによると、「「城の崎にて」（大正6年4月）は事実ありのままの小説で、鼠の死、蜂の死、

いもりの死、皆その時数日間に実際目撃した事だった。そしてそれから受けた感じは素直にかつ正直に書けたつもりである。いわゆる心境小説というものでも余裕から生れた心境ではなかった²⁶」とある。ここから「城の崎にて」には志賀の「いのち」に対する根本の思索が窺える。

小説の主人公は東京で電車の事故で怪我をし、「幸いに一生を得た²⁷」。この主人公を指す一人称の「自分」は、その後養生に但馬の城崎温泉を訪れる。「ある朝の事、一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた」、その「冷たい瓦の上の一つ残った死骸を見る事は淋しかった。しかし、それは如何にも静かだった²⁸」。

また、「ある午前、自分は円山川、それからその流れ出る日本海などの見える東山公園へ行くつもりで宿を出た。「一の湯」の前から小川は往来の真中をゆるやかに流れ、円山川へ入る。ある所まで来ると橋だの岸だのに人が立って何か川の中の物を見ながら騒いでいた。それは大きな鼠を川へなげ込んだのを見ているのだ。鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。(中略)鼠は何処かへ逃げ込む事が出来れば助かると思っているように、長い串を刺されたまま、また川の真中の方へ泳ぎ出た。(中略)全力を尽して逃げ廻っている様子が妙に頭についた。(中略)死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいふ動騷は恐ろしいと思った。(中略)そんな事があって、また暫くして、ある夕方、町から小川に沿うて一人段々上へ歩いていった。(中略)自分は何気なく傍の流れを見た。向う側の斜めに水から出ている半畳敷ほどの石に黒い小さいものがいた。蝾螈(いもり)だ。(中略)自分は蝾螈を驚かして水へ入れようと思った。不器用にからだを振りながら歩く形が想われた。自分は踞んだまま、傍の小鞠ほどの石を取上げ、それを投げてやった。(中略)もう動かない。蝾螈は死んでしまった。自分は飛んだ事をしたと思った。虫を殺す事をよくする自分であるが、その気が全くないのに殺してしまったのは自分に妙な嫌な気をさした。(中略)自分は暫く其処に踞んでいた。蝾螈と自分だけになったような心持がして蝾螈の身に自分になってその心持を感じた。²⁹」とある。

この小説は、「蜂」と「鼠」と「蝾螈」という三つの小動物の生と死をいかに尊いかを教えてくれたのである。この短編の独自の魅力は動物たちを人間の姿と重ね合わせて「永遠の、非時間的なもの³⁰」を示してくれる作品でもある。それは、心の痛みを体感し伝えてくれるのである。「死を思索し生を考えている」のである。『新潮』昭和11年11月に伊藤整が「城の崎にて」について、「短編は象徴であるか³¹」と以下のように指摘している。

「城の崎にて」は蜂の死、鼠の死がその温泉で、療養してゐる作家自身の重傷の経験の前面に於て扱はれてゐるからこそ、否ただそれだけによってあのやうな深い陰影を興へられてゐる。(中略)そこに浮かび出る作家の生活、作家自身の人間苦に参るのである(59頁)。

紅野敏郎(2002)³²は「城の崎にて」では、「蜂」と「鼠」と「蝾螈」という小動物を凝視

することとその生と死に対しての感慨」、「生命に対する執着の力」のようなものを感じずにはいられなかったという」志賀文学の精神的なものが考えさせられている。このような、生命に対する畏敬の念があることに志賀文学の本質的なものが見えてくると同時に、谷川俊太郎がいう「志賀さんの生き方に対する共感である³³」という、共感が湧くことが志賀文学において大変重要なのである。

ここでは、小説「城の崎にて」は一つの文学の場所である。生命と文学の精神に対する考えを深められる。文学に対する憧れを読者に誘発することと繋ぎ合わせている。

また、文学作品は地域に根差した資源に付加価値を生み出したのである。城崎の優位な特性は「城崎」という場所がこの小説で描かれている場所である。訪れた人々の旅の心をくつろがせるだけではなく、人々にこの小説自身に対する関心と呼び起こすことができる。小説「城の崎にて」は城崎を訪れる一つの誘発する要因になっている。同温泉の地理的空間の中で志賀の生き方や小説作品に想いを馳せ追体験することは、小説の舞台に「自分自身を見いだす」「城崎」という場所との空間上の結合であり、呼応している。さらに、命の存在を問うこの作品の、生命について考えさせられる唯一の場所となり得よう。

(2) 温泉地の文学的要素との出会い

城崎温泉は、平安時代から歌に詠まれ、志賀直哉、吉井勇、与謝野鉄幹など、多くの歌人や作家がこの地を訪れ、多くの作品を残している。城崎の町の自然美に親しむと同時に、「七つの外湯めぐり—文学の散歩道 文学碑を訪ねて—」という城崎文学碑³⁴の巡りも楽しめる。城崎温泉には、文学的要素は文化施設に融合させたのである。城崎ゆかりの文学碑、歌碑、句碑が多数あり、貴重な文学遺産として大切に受け継がれている。それらを巡りながら外湯を楽しむことができ、共感しあえることができる。

以下に、同温泉の文学碑を列挙する。

〈松尾芭蕉の句碑〉

「雲おりおり 人を休める 月見哉」

〈地藏湯 白鳥省吾の文学碑〉紀行文「旅情カバン」に収められている歌

「雪の城の崎 あの子の髪に 溶ける淡雪 わがこころ」

〈柳湯 富田碎花歌碑〉

「城崎のいでゆのまちの秋まひる 青くして散る 柳はらはら」

〈一の湯 与謝野寛（鉄幹）・与謝野晶子の文学碑〉

与謝野寛「ひと夜のみ ねて城の崎の湯の香にも 清くほのかに 染むころかな」

与謝野晶子「日没を円山川に見てもなほ 夜明めきたり城の崎くれば」

〈御所の湯 西坊千影の文学碑〉

「梅の香や 御所の湯あみの 女から」

〈温泉寺山頂 吉田兼好歌碑〉

「しほらしよ 山わけ衣春雨に 霽くも花も匂ふ たもとは」

〈温泉寺薬師堂前 有島武郎の文学碑〉

「浜坂の遠き砂丘の中にして 侘しき我を見出でつるかな」

〈まんだら湯 吉井勇の文学碑〉

「曼陀羅湯の 名さえかしこしありがたき 仏の慈悲に浴むとおもえば」

〈城崎文芸館前 志賀直哉の文学碑〉

「彼方の 路へ差し出した桑の枝で 或る一つの葉だけがヒラ／＼ヒラ／＼、同じリズムで動いてゐる。風もなく流れの他は総て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラ／＼ヒラ／＼と忙しく動くのが見えた。」

以上の地元の文化資源碑文の活用の魅力は、季節感を感じることができるとともに、旅人の想像が駆け巡ることにある。文学は「心得ているということ³⁵⁾」、さらに、文字の背後には人と人の心の交流がある。作家と読者との紐帯は作家は読者の最も表現したいものを表現したのである。自分の生命と他者の生命、自分の体験と他者の体験、このような経験は人と人が心が通じ合うということにより、感受性は更に鋭くなる。身体も癒されるだけではなく、同時に心を陶冶することと精神を磨くことをつないでいる。文学は、哲学者アリストテレスが『詩学』で指摘しているように、「詩人（作者）の仕事は、すでに起こったことを語るのではなく、起こりうることを、すなわち、ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で起こる可能性のあることを、語ることである。（中略）歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語るという点に差異があるからである³⁶⁾」。文学は「普遍的なこと³⁷⁾」「起こる可能性のあること」に深い関心を寄せている。そこに、文学は精神的に癒されることと考える力を育むものである。

〈城崎温泉駅前 島崎藤村の文学碑〉 碑文は

山陰土産

大坂より城崎へ

「朝曇りのした空もまだすずしいうちに大坂の宿を発ったのは、七月の八日であった。」

この島崎藤村の「山陰土産」(1927) 紀行文には、北但大震災(大正14年)当時の様子、また復興を描いたのである。復興に対するまち全体の「共存共栄」の強い意識が城崎のまちな昔からの考え方である。温泉街は壊滅的な被害を受けた城崎の人たちにとって外湯の復旧を最優先に取り組んでいるのであった。外湯に向けて培われた人と人との関わりと助け合いが震災という大きな危機を乗り越え、一人一人の心に根付いていたのである。同温泉では外湯にお客をいざなうための旅館の風呂(内湯)の大きさを制限しているルールもあり、家族経営の世代的継承、家族の愛情、おもてなしの気持ちも親から子へと受け継がれていくのである。これは、「住んでよし、訪れてよし」の骨子となっていると考えられる。地域住民の生活の場に触れる、人との交流を促している。

温泉にかかわる文学は精神の癒しである。文学は「文学と自然」、「文学と人」とがかかわる橋渡しであると言えよう。文学研究では人の心のふれあいが見えてくる。一方で、まちづくりに関心を持つのは、現実には生きている人々であると思われる。本稿は「城の崎にて」の精神性を掘り起こす」という視点から研究を試みた。これは、文学は現実の世界に持ってきて人の生き方に馴染むからである。しかも、それは人と人の心を繋いでいること、文学と文学が生まれる場所の関係と精神的なものの共感を呼び起こすからである。

城崎温泉は住民の日常生活とコミュニティのまちづくりに人情に対する温かいものが貫徹している。それは、温泉のように温かい。又、それは実は一つの関連性を築いている。このような関係は文学の世界と人の世界は合一、一体化している。人の精神も文学の精神も同じ心をつなぐと考えると考えられる。要するにこの点を言うと、このようなまちづくりの取り組みは、地元の住民と観光者にとって「住んでよく、訪れてよいまちづくり³⁸」であったのである。

特に今日にあって、コロナ禍によって私達の生活、未来、生命について行き先が不透明なとき、人と人との関係は更に不確定になった時代に文学は落ち着いて人と人との間の良好な関係を感じさせ、文学がこのような温かい感情をもっと確定させることができると考えられる。困難に直面している今日、不条理な現実の中でどのように生きていけばいいのかという思考に、「城の崎にて」の文学的要素の考えが城崎温泉のまちづくりに繋がっていくことは、今日に特別な意味がある。日本は火山列島のため、温泉も多々ある。従って、日本文学には温泉文学も極めて多い。今後は温泉文学研究に本格的に挑戦していきたい。

【注・参考文献】

- 1 社団法人日本観光協会編(1985)『観光地づくりの道標II—地域ぐるみの活性化方策』丸井工文社、42頁
- 2 『NHK ニュースウオッチ9』(2020年8月27日)、「コロナ禍を生きる、作家が語る“記憶”の役割」
- 3 李静和(1998)『つぶやきの政治思想』青土社、ページ数の記載がない。
- 4 小林秀雄講義、国民文化研究会・新潮社編(2017)『学生との対話』新潮社、40頁

- 5 『NHK ニュースウオッチ9』（2020年8月27日）、同上
- 6 中村雄二郎（1988）『場所（トポス）』弘文堂、8頁
- 7 同上、18頁
- 8 小川洋子（2009）『心と響き合う読書案内』PHP研究所、108頁
- 9 中村雄二郎（1997）『術語集II』岩波書店、62頁
- 10 河合隼雄（2015）『河合隼雄の読書人生—深層意識への道』岩波書店、245頁
- 11 公益財団法人日本交通公社編（2013）『観光地経営の視点と実践』丸善出版株式会社、29頁
- 12 国土交通省総合政策局観光部監修、観光まちづくり研究会編（2002）『新たな観光まちづくりの挑戦』、株式会社ぎょうせい、17頁。西村幸夫「まちの個性を活かした観光まちづくり」。西村（2002）は「まちづくり」という言葉は、「延藤安弘氏によると、（中略）ひらがなの「まちづくり」が意識的に使われだすのは1970年代後半からで、物理的な「まち」の開発や整備だけでなく、地域のコミュニティや広く生活環境一般にまで対象が広がり、「つくる」こともひとづくりや組織づくりなどソフトなネットワークを作ることにまで広がっていった」と指摘している。
- 13 社団法人日本観光協会編（1985）前掲書、41頁
- 14 松田忠徳（2017）『温泉手帳』東京書籍株式会社、149～150頁。「当代一の名医」の誉れが高かった後藤良山（1659-1733）は「病気になった場合、自立神経の調整のために温泉浴をすすめた。（中略）温泉に医学の眼差しを向けることによって、『湯治ブーム』が巻き起こり」という事象を生み出した。
- 15 山村順次（2010）『観光地理学—観光地域の形成と課題—』同文館出版株式会社、22頁、「香川修徳は日本で最初の温泉医学書『一本堂葉選続編』を著し、「温泉は気を助け、体を温め、血のめぐりを良くし、肌のきめを良くし、関節に利く」と説いた」（山村2010、p.22）のである。
- 16 「海内第一泉」の碑は「一の湯」の中庭にある。1962年5月に建碑されたもの、近代温泉学博士藤浪剛の書である。
- 17 江口宏志（2013）『注釈・城の崎にて』NPO法人 本と温泉、13頁
- 18 城崎文芸館 KINOBUN 公式サイト
URL: <http://kinobun.jp/>（参照日：2020年9月23日）
- 19 NHK『小さな旅』（2017年9月24日）、「少女の夢 湯にきらめく～兵庫県城崎温泉～」
- 20 城崎温泉きのさき温泉観光協会公式サイト
URL: <https://kinosaki-spa.gr.jp/about/history/beginning-part1/>
（参照日：2020年9月23日）
- 21 湯めぐり～城崎温泉まち歩き～
URL: <https://kinosaki.ooedoonsen.jp/>（参照日：2020年9月23日）
- 22 青柳正規（2015）『文化立国論—日本のソフトパワーの底力』筑摩書房、195頁
- 23 同上、195頁と201頁
- 24 豊岡市立コウノトリ文化館公式サイト
URL: <https://kounotoribunkakan.com/about.html>（参照日：2020年9月23日）

- 25 『近代文学の至宝 永遠のいのちを刻む 日本近代文学館創立 45 周年・開館 40 周年・成田分館開館記念展覧会』(2007) 財団法人 日本近代文学館、39 頁
- 26 志賀直哉(1928)『小僧の神様 他十篇』(岩波文庫) 岩波書店 2017 年第 22 刷、206 頁
- 27 高橋英夫編(1995)『志賀直哉随筆集』(岩波文庫) 岩波書店、111 頁
- 28 志賀直哉(1928) 前掲書、110 頁
- 29 同上、「城の崎にて」107 頁～116 頁
- 30 J.L ボルヘス(2002) 鼓直訳『ボルヘス、文学を語る』岩波書店、140 頁
- 31 伊藤整(1936)「短編は象徴であるか」『新潮』昭和 11 年 11 月号、59 頁
- 32 志賀直哉(1928) 前掲書、224 頁
- 33 同上、226 頁
- 34 城崎文芸館文学碑マップより
- 35 J.L ボルヘス(2011) 鼓直訳『詩という仕事について』(岩波文庫) 岩波書店、30 頁
- 36 アリストテレース/ホラーティウス(1997)、松本仁助/岡道男訳『アリストテレース 詩学・ホラーティウス 詩論』岩波書店、43 頁
- 37 同上、44 頁
- 38 阿比留勝利(2010)「まちづくりからの観光振興 ―参画と協働によるコミュニティの文化開発からの接近―」『城西国際大学紀要』第 18 巻第 6 号、2 頁

A study on motivating influences that literature
can have on machizukuri of a hot spring town
—Explore the spirit of <In Kinosaki>

Jiang Dongxing

Abstract

The subtitle of this research note is to explore the spirit of the literature 《In Kinosaki》. As there is a certain spirit rooted in the historical development of a town, what enlightenment can we reap if we probe the interrelationship between a particular piece of literature and the town where it originates. By examining the town of [Kinosaki], it is possible to understand motivating influences that literature can have on machizukuri.

Keywords: Literature, Hot spring, Machizukuri, Memory, Heritage, Spirit